

【目的】人間は家族の中に生まれ、育つ。いま、その家族・家庭生活が大きく揺れ動いている。従来の家族内役割の固定性からの解除、パーソナル化の進行、あるいは家庭生活のホテル化、など、子どもが育つ土壌としての家族・家庭生活は変化しつつある。子どもたちは、自らが育つ環境である家族・家庭生活の現状をどのように捉えているのだろうか。子どもの模倣遊びである『ごっこ』遊びの観察資料から探った。

【方法】群馬県内市立K保育所において、朝の登所後の自由遊び時の子どもの活動を観察し記録した（VTR併用）。観察時期は、1992年7月。

【結果と考察】①「お母さんごっこ」における出現頻度の高い場面は、「食べる」「赤ちゃんの世話」「お買い物」「寝る」である。②「お母さん」は最も人気の高い役割であり、年少児・年中児では複数人の存在も受け容れられる。「〇〇じいさん」「〇〇ばあさん」(=年寄り)は、相手を辱める方略として使われている。すでに構築された「ごっこ」の中へ後から参入する場合には、メンバーからの庇護を受ける「赤ちゃん」や「犬」「猫」(=ペット)の役割を取ると比較的スムーズに入れる。③子ども自身の性は、役割設定の重要な要件である。互いの役割(お母さん・お父さん・お姉さん・赤ちゃんなど)を呼称として頻繁に呼び合い、相互に役割を確認しているようであるが、しかし、役割は時に応じて変化し一貫性は乏しい。④これらの結果から、家族・家庭生活の姿は、従来のものと大きく隔たっているとは言い難い。それは、子どもにとっては、現実の家庭生活の可視的な日常性が圧倒的に優勢であり、そこに内在している姿容は象徴遊びとして現われるまでには未だ至っていないということであろう。